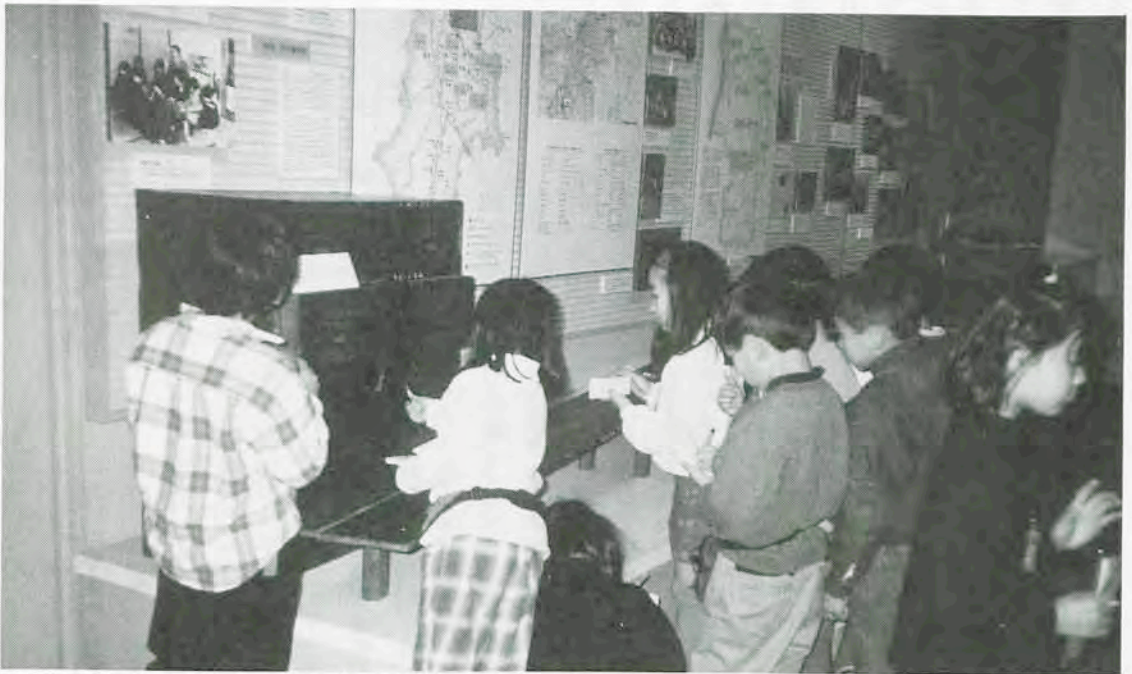


かたりべ 41

豊島区立郷土資料館だより



長野県の疎開先で使用したたんすと飯台を熱心に見入る子どもたち(2月17日の区立高南小学校3年生の見学風景)

「これ、なんだろうな。」

毎年一月から二月にかけて、資料館は区内の小学校の見学ラッシュが続きます。小学校三年で郷土の歴史を勉強するカリキュラムが組まれているためです。今年も二か月間で二三校の元気な三年生七二二名が見学に訪れました。

資料館では、小学生向けの展示ちらしを作成して子どもたちに配り、二〇分ほど展示の説明をした後、自由に見学してもらいます。子どもたちは唐箕や足踏み脱穀機などの農具、集団疎開の子どもたちの日記や絵、アトリエ村やヤミ市の模型など思い思いの場所に散らばって、熱心にスケッチしたりメモをとったりしています。展示資料の説明板が難しいので、「これなに？」と何でも興味をもって聞いてきます。そんな時はモノの名前だけでなく、使い方や、いとむかしの生活の違いなどを説明すると、目を輝かせて、ますます昔のモノに興味をもってくれます。

こうしてじっくりとモノと向き合いながら、地域の歴史を体で知ることが、学校教育にはない、博物館ならではの醍醐味といえるでしょう。最近では学校と博物館が共同で見学パンフレットを作る試みもみられます。学校の週休二日制の導入に伴い、子どもたちが博物館に親しむ機会がふえて、地域に博物館の「ちびっ子ファン」が数多く誕生することを願っています。(横山)

特集 新館設立に向けて XV

博物館の仕事ってナニ？ (9)

—ある学芸員の一日—

今回で9回目を迎えるシリーズ「博物館の仕事ってナニ？」ですが、今回は、豊島区立郷土資料館で働く一人の学芸員の一日を追って、郷土資料館の仕事の内容をご紹介しますと思います。

これまで、このシリーズの中で、博物館の仕事を豊島区立郷土資料館の例を中心として、特別展の開催・刊行物の発行・資料の整理・調査活動・フィールドワークの開催についてなど、様々な業務内容を紹介してきました。それらはどれも、博物館活動の根幹をなすものですが、博物館の学芸員はそれだけを仕事としているわけではありません。その他に、いわゆる日常の業務があり、これらについては、これまでご紹介する機会がありませんでした。そこで今回は、ある一人の学芸員の一日の作業を通して、郷土資料館の日常業務をご披露いたしたいと思います。

えっ、モデルは誰かって？それは内緒です。では、学芸員のビジネスグアイアリーに記載さ

れた項目をもとに一日を再現してみたいと思います。

AM 8…30 出勤 開館時間まで自席で朝刊に目を通し、博物館や文化財行政などに関する記事

をさがして切り抜く。切り抜いた記事はパスケースに入れて回覧へ。「あっ、裏にも大事な記事があったのに切っちゃった。」

AM 9…30 区内の小学生来館展示解説 三年生の社会科見学。郷土資料館の見学のあとに隣の防災センターを見学すること。時間がないけれども説明の手は抜けない。児童の顔を見ると、熱心に聞く者、聞かない者。学校によって説明中の雰囲気は様々。「こら、展示室を走り回るのは止めなさい！」

AM 10…30 テレビ局取材 トキワ荘に関する問い合わせ。以前展示を行った「トキワ荘のヒーローたち」の図録をもとに説明。郷土資料館で収蔵している資料も逐一チェック。ト

キワ荘で使用されていた襖に興味深々。担当者が図録を購入して帰る。「売れ行き、好調、

好調！)

AM 11…30 来館者からの質問 ご高齢の紳士。

昔自分が住んでいた所が、今どのようなになっているか質問。町並みがすっかり変わってしまい、昔の面影がないので困っている様子。

頼りはご本人が記憶している昔の住所。昔の地図を復刻した「豊島区地域地図」と今の地図とを照合しながらの説明。ようやく目的の場所が見つかり、紳士も担当者も納得。紳士はこれからすぐに訪ねること。

AM 11…45 区民からの電話 祖母の結納の品を寄贈したいとの申し出。訪問の日程を決めて電話を切る。「そういえば、午後から資料の受入があったっけ。」

PM 0…00 昼休み 同僚と近くの定食屋へ。食事後そのまま区役所へ車を借りに行く。「豊島区は道は狭いし、一方通行が多いし、まことに運転しにくい。車をこすらなさいいけど……。」

PM 1…15 区役所から車を借りて、いざ出発。目的地は豊島区千早。同乗者一人。本日の受

入資料は桐のダンスとミシン。

PM 1・30 目的地到着 資料の受入作業開始。

まず、資料についての詳しい聞き取り。誰がいつ頃入手したか、どの部屋で使用したかなど。一人が聞き取り調査をしている間に梱包開始。大きい資料の梱包は手間がかかる。丁重にお礼を述べて寄贈者宅を辞す。郷土資料館には収蔵スペースがないので、高田ことぶきの家の倉庫へ直行。「あとで実測と収蔵票（かたりべ40号参照）付けに來なければ。」

PM 2・50 車を返して郷土資料館に到着 とりあえず一服。留守中にはかの博物館から2件ほど電話があったので、電話をかけ直す。

PM 3・05 区内企業来訪 以前写真パネルの借用依頼のあった会社から担当者来訪。支店開業三十年記念にロビーに池袋駅前の昔の写真を展示したいとの由。「写真にみる豊島六〇年のあゆみ」展で使用した写真パネルの借用申込み。希望枚数は三十枚。資料特別利用申請書を渡し、後日の連絡を待つ。「最近、やけに写真パネルの借用申込みが多いな。」

PM 3・30 ワープロ打ち 『年報』の原稿の作成にかかる。原稿切れはとうに過ぎている。編集担当者の目が怖い。

ワープロに打ち込んでいる間にも電話がかかる。内容はアトリエ村について。こういう時

には郷土資料館職員共通の虎の巻「レファレンス帳」が役に立つ。以前区民からの問い合わせがあった質問内容と回答内容、回答に使用した資料の写や収蔵場所を控えてあるノートである。もともと、似たような質問内容でも若干のバリエーションがあるので、虎の巻だけに頼るわけにもいかない。ここが難しいところ。どうやら今回もテレビ局らしい。かつてのアトリエ村付近を歩くことを勧める。

PM 4・00 ワープロ中断 小中学校用の学習図書を作っている出版社から電話がかかる。学童集団疎開の解説に当館所蔵の写真を利用したいとのこと。すでに、学童集団疎開の展示図録は購入済。それをリスト代わりに借用依頼。使用の可否を伝えて電話を切る。「ここまで手回しがいいと話がはやい。」

PM 4・10 ワープロ再開

PM 4・30 ワープロ中断 印刷業者来訪。先日入札が済んだ刊行物の打ち合わせ。納期を覗みながらの校正等の作業行程の打ち合わせは打々発止、真剣そのもの。良心的で研究熱心な業者だと話が早い。しかし、そうじゃない業者だと、さあ大変！（とかくこの世はままたらぬ。）

PM 4・45 ワープロ再開 『年報』編集担当者の目が光る。されど原稿は思うように進まな

い。何度も「削除」キーを押しながら文章を打ち直す。ふと窓の外に目を向けると美しい夕焼け。「ああ、早く仕事を終えて一杯やりたい。」後ろを見ると「年報」編集担当者と目が合う。「もう一日も待てないヨ」と覗まれる。（遅れた私が悪いのヨ。）

PM 5・00 ようやく原稿完成 担当者に渡す。机の上に目をやると書類が山積み。あたまのなかに二つの標語が入り乱れる。

「明日できる仕事は今日しない。」

「今日できる仕事は明日に延ばさない。」

どちらを選ぶか、二者択一……

* * *

学芸員は机に向かって黙々と仕事をしていればいいというわけではありません。

以上紹介してきたように、資料の寄贈申込みや受け入れへの対応も郷土資料館の「命」に関わる最も重要な仕事です。これらの仕事のほか、区民の方々をはじめとする利用者からの電話での問い合わせや、窓口での質問に答えたりするのも学芸員の大切な仕事です。

このように、職員同士の緻密な協働体制の下で、学芸員がつねに利用者と接しながら仕事をしていくことによって、より利用者に近い存在の郷土資料館となっていくのではないでしょうか。

（伊藤）

アジア太平洋戦争中の集団学童疎開での豊島区に関わる最大の事故は、一九四五（昭和二〇）年五月三〇日深夜におきた山田温泉（長野県上高井郡山田村＝現・高山村）の火事です。この火事では池袋第五国民学校の疎開学童だった旅館が火元となり、七軒の旅館と商家・民家が焼け、同校の女子学童八人が焼死、重傷者は教員をふくめ三人を数えました。郷土資料館では昨年の特展『戦争と豊島区』の中のコーナーで、この事故についてとりあげました。その後、犠牲者の遺族の一人である露無健治さんから、火災前後の書簡や文書、メモ類などを資料館に寄贈していただきました。今回、その一部を収蔵展示室において展示することにしましたので、紹介させていただきます。（青木）

亡くなったのは露無さんの妹のしほさんです。つまり、これらは書いたしほさんが亡くな

す。池袋第五国民学校の六年生でした。汽船会

社に勤めていたお父さんはこの頃、台湾に単身

赴任中、一方、池袋にあった家は四月一三日の

空襲で焼けてしまい、お母さんやお兄さんは埼

玉県の浦和市などで間借り生活を始めてお

り、家族バラバラの状況になりました。

死後に届いた家族あての手紙

写真①は疎開先からしほさん（自分では

「汐子」と書いています）が家族あてに書

いた手紙の数々です。一つの封筒の中に数

個の手紙を入れて保管されていたので封筒

と中の書簡とが符合していませんが、いず

れも一九四五年五月中に書かれたものと思

われます。そのなかで日付の分かる最後の

ものは二八日付けの母親あてのもの、ま

た、封筒の消印は五月三〇日となっています。

最大の惨事

とその遺族

新寄贈資料

られた後、浦和に着いたものです。

“お国のために一生けんめい”

先の封筒にあった、台湾の父親あての手紙

（日付なし）の一節を次にあげます。（一）

内は注記）

お父さまがそちら

へ行かれてから、

空襲もだんだんひ

どくなつて、もう

ほとんど池袋あた

りは「家が」ない

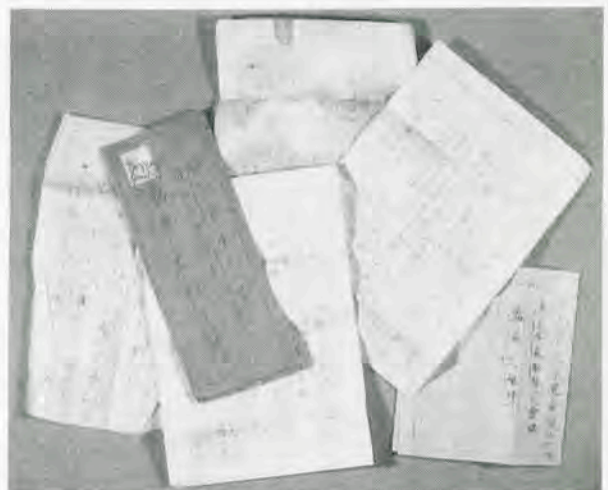
とのおはなして

す。板橋もうちの

やけた日に、やけ

てしまつて浦和の

をぢさんの所に、



①しほさんから家族あての手紙

お世話になつてゐるさうです。家がやけても皆んなが無事だときいて、ちつとも泣かずに元気で毎日すごして居ます。こちらで毎日わらびやぜんまいやとときなどをとり山へ行き、それをほして冬の食いやうをつくつて居ます。お父さんも安心しておくに、のために

はたらいして下さい。

この少し後にまた「お父さまもお国のため一

生けんめいにはたらいして下さいね。私も一生けん

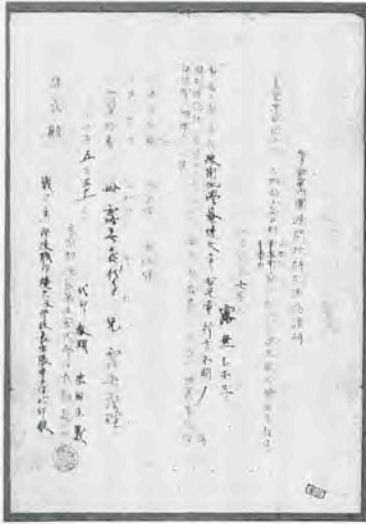
めいべんきやうしてお国につくす事のできる

りつばなひとになれるやう心がけます。」と続けています。

山田温泉へ徒歩で上がる

写真②③は火事でしほさんが行方不明との連絡を受けたお母さんとお兄さん二人が、山田温泉へ行った時の往復の証明書です。軍事優先と資材乏乏から、交通事情は極端に悪化しており、我が子の疎開先を訪ねるのにも、このような証明書が必要でした。バスの便も悪く、ふもとの須坂駅から徒歩で三人が現地に着いた時には既に火葬も終わっていたそうです。

山田温泉の旅館はみな、焼けており、お母さんたちは平穏村（現・山ノ内町）の渋温泉の旅館に泊まって数日間、須坂経由で山田村へ通いました。この間、知り合いの中野国民学校の先生に旅館の手配その他で助けて貰いますが、その関係のメモ類も資料に含まれています。



②「学童集団疎開地特別連絡証明」池袋第五校も空襲で焼けており、校長印も失われていることが書かれている。

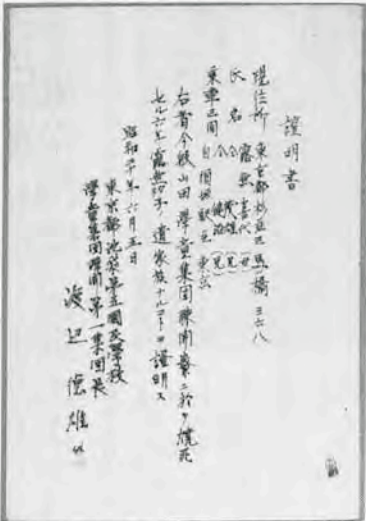
豊島区の集団学童疎開、

死んだ女の子

山田温泉の火災

寄贈資料には池袋のお寺で行なわれた一周忌や三回忌の案内状もあります。この頃には現地での追悼会は行なわれませんでした。

遺族たちの思い
その他、同じくわが子を亡くされた方からのお母さんあての手紙や、先生方からの手紙などもあります。遺族同士の書簡からは空襲による被災を逃れての地でまったく予期しない惨禍にあった方たちの悲しみと驚きとやり切れなさが読み取れます。



②東京へ帰るための証明書。焼け出されて間借り中だったため、遺骨は小布施の知り合いのお寺に預けた。

【集団学童疎開】アジア太平洋戦争末期、都市空襲を避けるため国民学校（小学校）の子どもたちを学校単位で地方に移して生活させたもの。おむね一九四四年八月から翌年一月まで続いた。豊島区立郷土資料館から「豊島の集団学童疎開資料集」が現在、六集まで刊行されている。

今回の寄贈資料は元々、数年前に亡くなられたご兄妹の母・喜代子さんが大事に保存されていたものです。そこには火事とわが子の死についてのこだわりの思いがこめられていたようです。出火原因その他についての事故の全貌を遺族は知らされていません。

慰霊像ができて

地元の方や池袋第五校の同窓生・先生方のご努力で慰霊の観音像が現地に建てられたのは火事から三六年たった一九八一（昭和五六）年のことです。健治さんが山田温泉に出かけられて旅館の方とお話しになったのがきっかけの一つでした。以来、五月三〇日には観音像前で毎年慰霊祭が開かれています。この悲劇もまた、戦争のもたらしたものととして将来の記憶にとどめておかねばならないでしょう。

活動報告 “地域史講座” で身近な問題を考えよう!

この講座は、私たちが住む豊島区の身近な歴史を知ること、現在の問題を解決する糸口をつかもうという意図で企画されています。講座は毎年開催しますが、今回は住宅地と住まいをテーマに設定しました。題して『郊外住宅地とすまいの形成』です。

私たちの住まいの環境は、明治以降に展開された都市の発達にもなって形成された、新しい住宅地と住まいから受け継いだものといわれています。そこで、このような近代特有の住宅地と住まいが、どのように実践されてきたか、各地の先駆的事例をあげながら、豊島区での実践例をみました。

講義は、内田青蔵講師（文化女子大学助教授）で、スライドを豊富に使って行なわれました。地味で難しいと思われるがちなテーマでしたが、アンケートの結果では、非常にわかりやすかったと好評でした。また、見学会は、講師の案内で建物を見学しながら行ないました。住まいの形成に対する理念が、実際にはどのような形に表現されたかということ、肌で感じてもらいたかったからです。

ところで、豊島区域では、大正から昭和初期



自由学園明日館：⑤見学会

見慣れてはいるが、館内に入るのは初めてという人が多く参加。子供サイズの机や椅子を前に、子供の目線になって見学。日本に多くの建造物を遺したF. L. ライトの設計。大正11（1922）年完成。

にかけて耕地整理事業が始められ、ほぼ関東大震災を機に、土地（農地）を住宅地として分譲していくこととなりました。この時の結果が、現在の道路幅や土地の区画を決定づける要因のひとつとなるとともに、住宅地としての住み心地にも影響していると考えられます。開催日時が不規則であったにもかかわらず、毎回20〜35人の参加者がありました。住環境が問題とされる今だからこそ、こうした地域の歴史を振り返ることの意味があるのではないのでしょうか。（福岡）



旧大川邸：④見学会

大正末、大田区田園調布に建てられた住宅。平成7年6月に「江戸東京たてももの園」（小金井市）に移築復元し公開。移築ほやほやの建物と見学会の数日前に完成したばかりの当邸の記録ビデオを拝見。

回	日時	内容
①	11/7(火)	近代の都市と郊外—ハワードの田園都市構想とわが国への影響—
②	11/14(火)	わが国の郊外住宅地開発の歴史・明治期—阪急電鉄を中心に—
③	11/17(金)	様々な郊外住宅地の開発・大正期—タイプ別にみた郊外住宅—
④	11/18(土)	「江戸東京たてももの園」見学—田園都市会社の開発した田園調布・大川邸—
⑤	11/20(月)	「自由学園明日館」見学—郊外に進出した学校—
⑥	11/24(金)	耕地整理事業と郊外住宅—豊島区耕地整理事業と郊外住宅—



連載 一点の資料から 《その15》

官製軍事郵便絵はがき第一号

一年前の「かたりべ」37号で絵はがきをとり

上げたところ、区民の方から二件の大量寄贈があり、現在整理作業を進めています。その傍ら新収蔵資料の紹介をかねて、明治期から昭和一〇年代までの戦争関係の絵はがきによるミニ展示「絵はがきにみる戦争」を企画しました。

明治期では日露戦争当時の絵はがきが一枚、大正期では六種二一枚の「写真」はがきを使って、日本が第一次世界大戦を経て近代兵器を採用し、軍備を増強していく様子を示しました。

そして昭和期は、(1)従軍画家による満洲事変の実況など、新聞社や陸軍、恤兵部発行の軍事郵便が二種六枚、(2)当時人気の挿絵画家に愛国恤兵財団助成会が腕を競わせた戦地慰問用が一種五枚、(3)展覧会特選・入選の戦争を題材とした絵画の美術はがきが二種五枚と、すべて「絵」はがきを使って展示を行いました。あえて「写真」はがきを避けたために、現実の出来事も画家の目と手でろ過して表現されていて、戦争の生々しき、暗さ、重さは見えてきません。戦争と画家、戦争画については様々な問題がありますが、これについては今後の課題とし、今回は、たった一枚の明治期の絵はがきをとりあげ、そ

の素性を明らかにしたいと思えます。

「鴨緑江の砲戦」と題されたそれは、周囲にアール・ヌーボー風の樹木と野砲及び乗馬の軍人を石版色刷りで配し、左下隅に絵が巻き上がったような余白を置き、中央に墨のオートタイプ版で写真を印刷したものです。画面右下に

小さく通信省発行の文字が入り、裏の宛名面に軍事郵便の表示があります。おそらく日露戦争を描いたものと推測されませんが、まずは絵はがきの歴史から調べることにしました。



起こりました。

日露戦争関係の記念絵はがきは、三七―三九年の三年間に計九回にわたり発行されました。そして戦争継続中の三七年九月五日に発行された第一回の戦役記念はがき(軍事郵便、六枚一組で一二銭)の中に、この一枚はありました。これは官製記念絵はがきとしては二回目の発行にあたり、かつ軍事郵便(恤兵)絵はがきとしては最初のものとなります。

なお、当時ヨーロッパでも流行の石版色刷りに写真版を合わせる技法は、前述の官製第一号の直後、日本赤十字社から六種の記念絵はがきが発行された際に研究完成されており、それを踏襲して同じ東京印刷会社で印刷したようです。

「恤兵」も聞き慣れない言葉ですが、「物品・金銭を寄贈し兵士を労う」という意味があり、宛名面に「軍事郵便」と印刷された絵はがきは、恤兵絵はがき(戦地の将兵に無料配布され、戦地から出すものは無料となる)であることがわかりました。それに対して慰問絵はがきは内地からの戦地向け郵便で、国内と同額の切手を貼付する必要があります。この両者については、今後も調査を続けていくつもりです。(小池)

郷土資料館なんでもQ&A

Q 西武線に東長崎という駅がありますが、駅のある場所は、長崎町の西のように思われませんか。なぜ、東長崎と言う駅名がついたのですか。

A 東長崎駅は、現在長崎五丁目と南長崎五丁目の中にあります。長崎は長崎・南長崎ともに東から一丁目・二丁目……となりそれぞれ六丁目まであります。駅のある場所は長崎全体から見ると西に片寄っていて、旧長崎町や長崎村の範囲から見ても、特に東というわけではありません。

西武鉄道の広報課に問い合わせしてみました。が、残念ながらはっきりとしたことはわからないということでした。

西武鉄道は、最初は武蔵野鉄道と言いました。



明治四五（一九一二年）年に武蔵野鉄道株式会社が発立され、池袋から飯能までの鉄道の建設が着手されました。鉄道は、大正四（一九一五年）四月一日に開通し、東長崎駅は開通当初の駅として開業されました。

いろいろとあたってみますと、「東長崎は、長崎だけでは九州の長崎と同じで困るから、東の長崎という意味でつけた」と古老は述べている。（『豊島風土記』）とい

う記載がありました。

今の所はっきりと確定はできませんが、埼

玉県の東松山などと同様に、西の有名地名と間違われなために、

わざと「東」を頭につけたものと思われる。（小林）



昭和初期の東長崎駅

編集後記

今年に入って寒い日が続きましたが、三月になり暖かい日差しが春を感じさせるこの頃です。今年度最後のかたりべ41号をお届けします。

以前かたりべ36号のQ&Aで、駒込四一二にあった染井能楽堂についてとりあげました。そこでは取り壊された能楽堂の用材が横浜市管理するところとなり、平成八年に横浜市掃部山公園の能楽堂として復活する予定であることをお知らせしました。それがついに来る六月二十八日、「横浜能楽堂」として甦ることになったのです！かつては松平家の屋敷内にあり、小津安二郎の映画にも登場した由緒ある能楽堂が豊島区に残らなかつたことは残念なことですが、能楽堂として復活をみたことは、この世知辛い世の中においてまさしく朗報といえるでしょう。一度、資料館職員で能楽の鑑賞がてら、染井能楽堂の第二の人生を祝福に行きたいと思っています。

(Y)

かたりべ

No.41

1996年3月15日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351

豊島区広報印刷物L30-07-073
本紙は再生紙を使用しています